

孝子伝、二十四孝と孟蘭盆経注——仏教と文学——

坪井直子

一、はじめに

二、沙石集と孟蘭盆経疏新記下の孝孫説話について

三、孝子説話と父母恩重経

四、曾参説話と父母恩重経

五、おわりに

日本文学における中国孝子説話と言え、陽明文庫蔵孝子伝や船橋家旧蔵京都大学附属図書館清家文庫蔵孝子伝、蒙求注、そして室町時代以降に二十四孝が知られ、これらの文献については、今野達氏、黒田彰氏、徳田進氏など先学により、実態が解明されてきた。しかし、その他の文献については、あまり顧みられていない。

孝子説話は唱導の場でよく用いられたが、それは孝思想を受容した中国仏教の流れを汲むからで、説話の摂取源には、仏教文献引用の中国孝子説話もあった。

本稿は、こうした仏教文献の中で、孟蘭盆経の注に着目し、そこに見られる説話と日本文学との関係を考察した。その結果、沙石集三の孝孫説話が、孟蘭盆経注の一つである元照の孟蘭盆経疏新記を典拠とすること、また、それが父母恩重経に拠ると考えられ、説話の改変、流布には宗密の孟蘭盆経注釈も関わることを明らかにした。

一、はじめに

日本文学における中国孝子説話と言え、陽明文庫蔵孝子伝や船橋家旧蔵京都大学附属図書館清家文庫蔵孝子伝（以下、二つの伝本を一緒に取り上げるときは両孝子伝とする）、蒙求注、そして室町時代以降に二十四孝の説話が知られる。両孝子伝については、今野達氏、黒田彰氏、二十四孝については徳田進氏をはじめとする先学により、実態が解明されてきた。^①だが、その他の文献については、あまり顧みられず、高橋伸幸氏が蕭広済孝子伝などに注目されているぐらいである。^②

孝子説話は唱導の場でよく用いられたが、それは孝思想を採り入れた中国仏教の流れを汲むからで、孝子説話の摂取源には、両孝子伝や蒙求注の外に仏教文献もあった。例えば、法苑珠林や止観輔行伝弘決のように、中国の仏教文献の中には孝子説話を引用するものがあり、そこから摂取された説話もあったのである。

本稿では、このような仏教文献の中で、孟蘭盆經の注に注目し、そこに見られる説話と日本の説話との関係を考察する。孟蘭盆會は盛んに行われる仏教行事であるから、そのための仏典注釈書が編纂され、そこに孝子説話も引用されている。孟蘭盆經の注としては、唐宗密の孟蘭盆經疏

（以下、宗密疏とする）、宋元照の孟蘭盆經疏新記（以下、元照新記とする）、宋普観の孟蘭盆經疏会古通今記、明智旭の孟蘭盆經新疏などがあるが、本稿では、影響力があった宗密疏と、さらにそれを注釈した元照新記を取り上げる。

二、沙石集と孟蘭盆經疏新記下の孝孫説話について

沙石集三（六）「小児ノ忠言事」には、両孝子伝によって広く知られた中国の孝孫（原谷）説話すなわち孝孫が父とともに祖父を棄てにゆく説話が収録されている。この説話は、万葉集十六の竹取翁歌にも詠まれるほど古くから享受されてきたもので、多くの文献は両孝子伝を原拠とする。しかし、沙石集卷三に収録された孝孫説話には、両孝子伝に無い要素が見受けられ、他の文献との関わりが考えられる。次に該当箇所を上げて検討してみる（米沢本を底本とする新編日本古典文学全集卷三（四）「幼稚の童子の美言の事」に拠る）。

漢朝に^{a1}孝孫と云ふ者ありけり。^b年十三歳なりけるが、父、妻が詞につきて、年たけたる親を山へ送つて捨てぬ。孝孫幼かりけれども心ある者にて、^{d1}父を諫めけれども父用えず。^{a2}源谷・元啓と云ふ二人の子手輿に載せて山へ送りて捨てて帰る。^{a3}元啓この輿を持ちて返らんとす。父が云はく、「持ちて帰りて何か

せん」と制してければ、「父の年たけ給ひたらん時、持ちて捨てん為」と云ひけるに心づきて、我れ父を捨てば、また我を学びて、我が捨てられん事を思ひて、また親を具して返りて養ひけり。^{d2}父を諫むる計事、実に智恵深くこそ。人の習ひ、吉事をば学ばねども、悪しき振舞をば学ぶ事なれば、かく云ふにつきて、父慎みて親を養ひけり。祖父を助け、父を戒めたる孝養の名、天下に聞えき。孝孫とぞ申しける

この説話について、小島孝之氏は、「本話の原拠は、『孝子伝』巻上であるが、かなり細部が異なっている。本話の直接の出典は未詳」、「妻の言葉にそそのかされて、とする筋は、『孝子伝』系諸本には見られない」、「ここで突然、子が源谷と元啓の二人になるのは奇妙。底本〔米沢本〕以外の諸本は、「元啓ト二人」とあつて、父と元啓の二人である。ところが『孝子伝』系の原話では、子の名前は最初から原谷である……あるいは「元啓」は「原谷」の訛伝であらうか。底本は原拠から改変する際に原話を読み誤った可能性がある」と述べられている。⁽³⁾

小島氏の指摘を、次に両孝子伝の原谷条を上げて沙石集と比較し、確認してみる（幼学の会編『孝子伝注解』〈汲古書院、平成15年〉に拠る）。

【陽明本孝子伝】

楚人、^a孝孫原谷者至孝也。其父不孝之甚、乃祖父年老厭患之。使_下原谷作_レ輦扛_二祖父_一送於_中山中_上。原谷復將_レ輦還。父大怒曰、何故將_二此凶物_一還。答曰、阿父後老復棄_レ之、不_レ能_レ更作_レ也。頑父悔悞、更往_二山中_一迎_レ父率還。朝夕供養、更為_二孝子_一。此乃孝孫之礼也。於是閨門孝養、上下无_レ怨也。

【船橋本孝子伝】

^a孝孫原谷者楚人也。其父不孝、常厭_二父之不_レ死_一。時父作_二輦入_レ父_一、与_二原谷_一共担、棄_二置山中_一還_レ家。原谷走還、賣_下來載_二祖父_一輦_上。呵嘖云、何故其持來耶。原谷答云、人子老父棄_レ山者也。我父老時、入_レ之將_レ棄。不_レ能_レ更作。爰父思_二惟之_一更還、將_二祖父_一歸_レ家、還為_二孝子_一。惟孝孫原谷之_レ方便也。拳_二世聞_レ之_一。善哉原谷、救祖父之命、又救_二父之二世_一罪苦。可_レ謂_二賢人_一而已。

小島氏が指摘された通り、沙石集の——部a2、a3孝孫の名前を元啓とすること、——部c「妻が詞につきて（妻の言葉にそそのかされて）」といった記述が両孝子伝にはない。その他にも、——部b孝孫の年齢や、——部d1、d2孝孫が父を諫める記述が、両孝子伝にはないのである。これらの記述は、何に拠るのであろうか。

孝孫説話は、中国漢代にまで溯る説話で、その主な文献

には、中国の先賢伝逸文（令集解賦役令17条「釈」、敦煌本句道興搜神記（「史記曰」、孝子伝逸文（太平御覽五一九、事文類聚後集四、天中記一七、淵鑑類函二四五等）、孝子伝逸文（令集解賦役令17条「古記」、孝德伝逸文（元照新記下）、碑史逸文（淵鑑類函二七二）、群書拾唾24、朝鮮の孝行録17（二十四孝、孝行録系）、三綱行実一、日本の注好選上57、今昔物語集九45、言泉集祖父帖、普通唱導集下末、私聚百因縁集六10、内外因縁集（陽明本系）、類雜集五38、万葉集一六竹取翁歌、昔話「姥棄山」もつこ型がある。幼学としての性格が強いからか、中国よりも日本に古形を留める史料が残る。

さて、これらの文献の中で注目されるのは、沙石集と同じく孝孫名を「元啓」とする元照新記で、孝徳伝という未詳文献に拠るらしい。次に元照新記を上げるが、この部分は、孟蘭盆経「不見飲食皮骨連立。見其亡母生餓鬼中」（目連が餓鬼界に母親を見付ける部分）の解釈（四得見所在）に用いられた、宗密の注釈（疏）中の孝孫説話関連の記述「故昔有_レ送祖林野。乃持_レ輿迴帰_上」を、さらに元照が注釈したものである（正統藏経35巻に拠るが、宗密疏については、大正新脩大藏経39巻を参照し異同を「」で記した。またへ内は割注、〔疏〕は唐宗密による仏説孟蘭盆経の注、〔記〕は宋元照による宗密疏の注である）。

〔疏〕故恩重經云。夫妻和合同作_二五逆_一。或時呼_二喚急速走使_一。〔父母之語〕十度九違。不_二相從順_一。罵詈瞋毒。生存尚爾。没後_{〔還〕}可_レ知。自既不仁、兒豈能孝。故昔有_下送祖林野。乃持_レ輿迴帰_上。以_レ古觀_レ今雖_二跡異_一而心同也。

〔記〕初引_レ經急速走使、謂_二父母有_二急切之事_一欲_レ使_二其子_一十度。經作_二十喚_一、毒字寫錯。經作_二瞋恚_一（孤山云、走使下、依_レ經有_二父母之語_一、四字檢_レ經並無、又云、瞋毒字誤合_レ作_二瞋目_一、皆非_レ、生下_二拳_一存況_レ没、身下推_二已所致_一、送_二祖林野_一者、孝徳伝云、_a元啓_b年十歲、其_c祖年老、父母令_二啓與送_二深山_一。啓苦諫不_レ從、既而送、往乃收_レ輿而返。父曰此何用耶。啓曰、復當_レ送_レ父。父遂感_レ之、方復收養。然啓本欲_レ感動其父、而非_二不孝_一。今且取_二子孫傲上之義_一耳。跡異謂_二古今事別_一、心同謂_二相承不孝_一。

部が孝徳伝である。孝孫名aが沙石集と同じであることの外に、何歳かは一致しないがb年齢、c孝孫の母親（沙石集では妻）の記述もある。また、沙石集d1、d2の孝孫が親を諫める記述についても、元照新記にはd「啓苦諫」と該当の記述がある。つまり沙石集と孝子伝との間で異なる要素は、元照新記との間では、ほぼ一致するのであ

る。

沙石集では、題目に美言（諸本、忠言）とあり、文章にもd1「父を諫めけれども」、d2「父を諫むる計事」とあるから、諫める行為を重要視したと考えられる。そのため一般的な両孝子伝ではなく、諫める行為を明示する元照新記を採用したのであろう。但し、d2「父を諫むる計事」は、船橋本孝子伝d「方便」（前掲——部）に拠るようだ。方便とは善に導く行為で仏教語であろう。船橋本孝子伝が仏教語（前掲——部）を多用することは、西野貞治氏によって指摘されている⁵。したがって、船橋本孝子伝にもその要素があると言え、沙石集は、日本で一般的な船橋本孝子伝の上に、元照新記を用いたのだらう。

沙石集は元照新記の利用を明示しない。だが、著者の無住は、宗密の禅教一致論を学んでいたようで、沙石集四（一）「無言上人事」には宗密の禅源諸詮からの引用があるし、卷三（六）「梅尾上人物語事」には景德伝燈録一四にある宗密の伝記からの引用もある。もともと孟蘭盆会は重要な年中行事であるから、その注釈書として元照新記も参照されたに違いない。

宗密疏や元照新記は、無住の著書以外でも、言泉集亡父帖に「私勘孟蘭盆經疏云宗密……同記云元照」「私勘孟蘭盆經衆記云」、私聚百因緣集卷六（七）に「宗密禪師孟蘭盆

疏新記云」とあり、浄土宗の良忠の著書（往生要集義記三「靈芝（元照）孟蘭盆經疏新記云、風樹恨者……」や、聖岡の著書（往生礼讃私記見聞下「此義中引宗密疏靈芝記疏是孟蘭盆經疏記亦彼新記也」）にも引用が確認出来る。また近世でも利用されている。宗徳愚道の勸孝記下「三一董黯母の讐を殺事」には、「孝徳伝に明せり」とあつて、内容からも元照新記引用の「孝徳伝」と両孝子伝を合わせたとみられる董黯説話が載せられている⁶し、恵空の童子経諺解末「許孜自作墓、松柏植作墓」注でも、「松柏」の説明に元照新記が用いられている。沙石集は元照新記を用いたと見てよいであらう。

三、孝孫説話と父母恩重經

沙石集や元照新記の孝孫説話の年齢（b）や親を諫める行為といった要素（d）は、両孝子伝には見当たらないが、令集解賦役令引用の先賢伝（「歳初十歳」「因諫不能止」）や、句道興搜神記（「年始十五」「諫父」「苦諫其父、々不従」）には存在する古くからの要素である。また、名前「元啓」は、宋代の二十四孝である孝行録系二十四孝の「元覚」と関わるならば、「元覚」は孝子伝の「原谷」「原穀」と音通となるので、やはり古くからの要素となる。しかし、妻（母）の要素（c）については、太平御覧五

一九所引孝子伝や淵鑑類函二四五所引孝子伝といった宋代以降の文献にしか見られず、新しく加わった要素らしい。この要素が何に由来するのか、次に考えてみたい。

宗密疏の孝孫説話の前には、親不孝を述べる父母恩重經の記述が引用されている（前掲史料元照新記引用……線部）。宗密が用いた父母恩重經は現存のものとは少し異なるので、参考までに次に大正藏經（85巻）の父母恩重經をも上げる。

夫妻和合同作_三五逆。彼時喚呼。急疾取使。十喚九違。

尽不_三從順_一。

宗密が引用した父母恩重經については、新井慧普氏が、引用は下巻において七回になる、不孝者について言及する部分で父母恩重經を経証に用いる、引用の父母恩重經は古本に属する系統であることを指摘されている。^⑦この部分も、濁世では仁孝が少なく妻子を憂えるばかりで追福を厭う者が多いという宗密の嘆きの後に、父母恩重經が引用され、そして不孝者の話でもある孝孫説話が記述される。即ち、子供にあたる夫と妻はともに五逆を働き、父母が急用で呼んでも十回のうち九回までも応えず罵り怒るといった子供の不孝を父母恩重經から引用し、その後に孝孫説話が用いられているのである。孝孫説話は、本来、孝行者の話であるが、一方では不孝者の話である。父親が祖父を棄てよう

とする、言い換えるならば、息子が父親を殺そうとする説話であって、仏教の五逆の一つである「父を殺す」に相当するものなのである。そのため、宗密は、父母恩重經の説く「夫妻和合同作_三五逆_一」の例証として、孝孫説話に言及したのである。そしてさらに、元照新記は、孝徳伝を引用して詳しく孝孫説話を注釈しているのである。

ここで特に注目したいのは、父母恩重經では、子供一人が五逆を犯すのではなく、子供夫妻が同調して五逆を犯す点である。両孝子伝をはじめ古い時代の孝孫説話では、父親だけが祖父を棄てようとする、即ち単に子供が親を殺そうとする説話であった。それが唐宋か宋以降に母親が加わるのは、父母恩重經の子供夫妻が共同で五逆を犯す、孝孫説話に即して言えば、父親と母親が同調して五逆を犯すとするのが影響したのではないか。とすれば、父親一人が祖父を棄てようとする説話が、父母恩重經によって、父親と母親の二人が同調して棄てようとする説話へと変化したのであり、それが元照新記を通じて、沙石集の「父、妻が詞につきて」即ち、「父親は、妻（孝孫からすれば母）の言葉にそそのかされて」という記述に繋がったと考えられる。

四、曾參説話と父母恩重經

元照新記には、父母恩重經の影響を受けたと考えられる説話がもう一話ある。それは、目連が父母の乳哺之恩に報いようとする部分の解釈（二知恩欲酬）に引用された曾參説話である。次にその部分を上げる。

〔疏〕父母恩重（經）云。父母懷抱、和和弄弄、含笑未語、（含笑未語、和和弄弄）

語。飢時須食、非母不哺。渴時須飲、非母不乳。云。十指甲中食、子不淨、云計論母恩、昊天罔極。

嗚呼慈母云何可報云。至於行來東西隣里、井竈確磨、不時還家。母忽心驚、兩乳流出。即知我兒家中憶我。即便還家、（反）如鬻指心痛。

〔記〕從初至不淨、叙恩深。和和弄弄語之聲、指甲受穢食之不惡。計下歎難報、至於下乃至後段莫復過是、來並彰愛重。此叙寒賤之家為人傭作、故云井竈等。不時謂不及時註中即、曾子出外、人伝曾參殺人、母嚙指念之、參即心痛、此即母感於子、經中子感於母復云反如。

部が曾參説話である。曾參は孝子として名高いため、いくつもの孝行話が伝えられており、陽明本孝子伝には、五孝と呼ばれる五種類の孝行話（彈琴譚、嚙指譚、感泉譚、

避境譚、鵝臯譚）に加え、さらに三種類の説話（投杼譚、絶漿譚、不娶譚）が列挙されている。⁽⁸⁾しかし、元照新記

部は、嚙指譚と投杼譚の二種類だけの構成である。孝行の種類が選択され、記述が簡素化されるという現象は、唐代からみられる。貴重な唐初の孝子伝図の遺品である陝西歴史博物館蔵三彩四孝塔式缶の曾參図には、彈琴譚と感泉譚の二種類、二十四孝では嚙指譚の一種類だけが選ばれている。

さて、元照新記は二種類の孝行話から成るが、その構成は少々変わっている。通常、孝行話というのは、伝統的な孝子像に強く支配されるらしく、孝行の典型例が出来上がっていて、内容が変化することは稀である。したがって、一人の孝子で複数の孝行を語る場合、それらの孝行話は列挙されるだけである。しかし、元照新記部は別々の話が合わさり一つの話を形成する。

本来嚙指譚は、不意の来客に、外出中の息子の曾參を呼び戻すため、母親が自分の身体の一部を嚙んだところ、曾參は胸騒ぎがして直ぐに帰宅したという説話であり、投杼譚は、曾參が殺人を犯したと誤って母親に伝える者がいて、母親は息子を信頼して二度まではその話を信じなかったが、三度に及んだ時は、それまで平然と機を織っていたのをやめ、垣根を越えて逃げたという説話であって、別々の話で

ある。しかし、元照新記――部では、曾参の母親は、外出中の息子が人を殺したと伝えられたために、息子を思つて指を噛み、息子は胸が痛んだという話になつてしまつてゐるのである。なぜ、このような二種類の孝行話を合わせたものが出来上がったのだろうか。

元照新記――部は、宗密疏――部の注釈である。宗密疏では、母親が外出先で赤子が泣いて親を慕つていないかと思つと、母親の胸が騒ぎ乳が流れ出るという父母恩重經の經文の引用（――線部）に対し、齧指心痛の反対のようなもの（――線部）という註が付けられている。元照新記――部が引用する曾参説話は、この齧指心痛を注釈したものなのである。ここで注目したいのは、齧指心痛の前に引用された父母恩重經中の、家に置いてきた子供を心配して胸が騒ぐ母親の姿である。父母恩重經の、離れた場所にいる子供を心配する母親の姿は、元照新記中の、外出先の曾参が殺人を犯したのではないかと心配する母親の姿と重なる。父母恩重經ではどのような艱苦も厭わず、子供の世話をする母親像が示される。それが、殺人を犯した息子でさえ心配する母親像を作り出したのではないだろうか。

元照新記のような構成の曾参説話は、今日では大変に珍しいが、当時は決して特別ではなかったであろうことが、次に上げる一九九四年に山西省で発掘された山西長治市魏

村金代紀年彩繪磚雕墓（長治市博物館）の西壁磚雕「曾参図」の銘文から窺える（私に返り点等を付す）。

曾参在山伐薪、母聞曾参殺人、曰、我子□学、何殺人、有之、如此凡三、果疑。乃杖□。参有山忽

覚心痛、乃婦其舍而見老母――

天德三（一一一八）年に描き終わつたとするその二十四孝図の曾参の銘文は完全には判読出来ないが、構成が元照新記と同じである。また、その名残か、宋代の二十四孝の系統である孝行録前贊章6「曾子覚痛」の贊には、次のように齧指譚の後に投杼譚が記される（東京大学附属図書館南葵文庫蔵本による）。

曾子乾々、事親養志、（齧指譚）在野負薪、有客来止、心動遽帰、縁母嚙指、誠乃天道、孝為行原、彼痛此覚、一体所分、（投杼譚）豈惑三告、投杼踰垣

これら二十四孝関連史料からすれば、父母恩重經に拠つたとみられる元照新記――部の曾参説話は、二十四孝と深い関係にあるか、もしくは二十四孝そのものということになる。

曾参説話はもちろんのこと、母親が登場しないとはいえ孝孫説話も宋代の系統である孝行録系二十四孝中の一話である。父母恩重經と中国孝子説話との繋がり、通史的に

みても、唐代にまで溯るとともに二十四孝へと連なる。父母恩重経最古本の丁蘭本は唐初のもので、丁蘭、董黯、郭巨の三人の中国孝子説話に続けて、睽子本生が記されている。睽子本生は、中国孝子説話集であるはずの二十四孝の構成話となっているので、丁蘭本は二十四孝の始まりとも言ふべきものであろう。また、唐末に作成されたいし故円鑒大師二十四孝孝押座文には、中国の孝子説話を示す記述「万代史書歌舜王、千年人口讃王祥……」とともに、父母恩重経の経文による記述「両肩荷負非為重、千繞須弥未可償……」があり、道端良秀氏は、「孝子の例を掲げ、「心地観経」や「父母恩重経」の内容と同じように、父母の慈恩と子を育てる労苦を説き、これにも関らず児の大きくなつて不孝あるを述べ、不孝は墮地獄の因と説く」と説明されている¹⁰⁾。

道端氏は父母恩重経の流布について、「父母恩重経」が単にかかる庶民社会への普及と言うのみならず、……宗密の如き学匠によつて、「孟蘭盆経疏」の内に、二カ処もこの経典を引用して、文証としていることは、この経典をして、權威あるものとして、学界に紹介されたことも亦、この経典の普及に、大きな力を添えるものである」と述べられている¹¹⁾。とするならば、宗密の影響で、父母恩重経と中国孝子説話（おそらく二十四孝）は、孟蘭盆経とともに享

受されたのであり、二十四孝押座文に目連や釈迦の孝行の記述「目連已救青提母、我仏肩昇浄飯王」があり、元照新記に二十四孝と関わる孝子説話があるのも、そのためなのであろう。

五、おわりに

沙石集の孝孫説話は、元照新記が引用した孝子説話を典拠としていた。そしてその説話は父母恩重経と関わり、説話の改変、流布には宗密の孟蘭盆経注釈も関与していたとみられる。となれば、この説話は、中国仏教が孝子説話を受容したのみならず、積極的に関わっていたことの証であり、儒教的伝統下にある孝子説話にもた然なくなつた中国仏教が、仏教的要素を盛り込んだ孝子説話を欲した結果、生まれてきたのではないだろうか。残っている唱導資料は少なく、孝子説話が仏教内でどのように用いられていたかは未解明の部分が多くある。そのような中で、宗密疏、元照新記など孟蘭盆経の注には、孝孫説話の他にも、唐宋代の仏教が多用したと考えられる孝子説話を収録し、さらには、それらの一部が、日本でも広く流布した二十四孝の説話と重なつていて、貴重な文献と言える。今後、日本で享受されている中国孝子説話の成立と展開を解明するために、さらに仏教における孝子説話の実態を追究する必要がある

う。

注

- (1) 今野達氏「古代・中世文学の形成に参与した古孝子伝二種について—今昔物語集以下諸書所収の中国孝養説話典拠考—」(『国語国文』27—7、昭和33年7月、『今野達説話文学論集』〈勉誠出版、平成20年〉に再録、黒田彰氏『孝子伝図の研究』(汲古書院、平成19年)、徳田進氏『孝子説話集の研究—二十四孝を中心に—』(井上書房、昭和38年)等。
- (2) 高橋伸幸氏「宗教と説話—安居院流表白に関して—」(説話・伝承学会編『説話と宗教』桜楓社、平成4年)
- (3) 小島孝之氏校注『沙石集』(『新編日本古典文学全集』52、平成13年) 12頁頭注九、一二、一三
- (4) 年齢数は、十歳とするものに令集解賦役令引用の先賢伝、元照新記、十五歳とするものに句道興搜神記、太平御覧五一九所引孝子伝、淵鑑類函二四五所引孝子伝がある。沙石集のみ十三歳で、梵舜本は十一歳とする。問題だが、誤写であるかもしれない、今後の課題としたい。
- (5) 西野貞治氏「陽明本孝子伝の性格並に清家本との関係について」(『人文研究』7・6、昭和31年7月)
- (6) 徳田進氏は、古今大成二十四孝下の董黯説話が勸孝記に範を求めたとしつつ、船橋本孝子伝や内外因縁集の説話とも比較されているが(『孝子説話集の研究 近世篇—二十四孝を中心に—』〈井上書房、昭和38年〉本論五章一「董黯説話と勸孝記」、元照新記の説話も加えるべきである。
- (7) 新井慧誉氏「宗密『孟蘭盆経疏』引用の『父母恩重経』

(宗密本)、『木村清孝博士還暦記念論集…東アジア仏教—その成立と展開』(春秋社、平成14年)

(8) 分類は幼学の会編『孝子伝注解』(汲古書院、平成15年)による。

(9) 「山西長治市魏村金代紀年彩繪磚雕墓」(『考古』二〇〇九年第1期)

(10) 道端良秀氏「補遺二十四孝と仏教」『唐代仏教史の研究』(増訂再版、法蔵館、昭和42年)

(11) 道端良秀氏「父母恩重経について」『唐代仏教史の研究』(法蔵館、昭和32年)。

本稿は、平成二十四年七月(於長野短期大学)に行われた日本文学協会第二十九回研究発表大会中世部門における口頭発表に基づきます。席上その他の場所におきまして、ご教示を賜りました先生方に厚く御礼申し上げます。